

スズメとミナミと、旅人コウキと

スズメとミナミと、  
旅人コウキと

敦賀市立栗野南小学校

六年 伊原 志織



各務原市立蘇原第二小学校

六年 加藤 彩佳

立川 兼松 楓子  
加藤 真望  
飯沼 遥奈  
永井 希歩  
加藤 彩佳

く旅の始まりく

まだ誰もが寝静まっている早朝、一人の少女がバイクに乗って町を後にした。

「ピーピー（本当にいいの）」

少女の肩に乗っていた小鳥が鳴いた。

「うん、いいの」

少女はうなずきながら、小鳥に語りかけた。

「ピーピー（ミナミ、後悔しない）」

少し間をおいて、

「うん……私が彼の旅を続けるんだ」

バイクのスロットルをもう一度強くし、少女と小鳥は走り去った。

く一章く 旅人コウキ

ある日の午後、私は、友達のサクラやヒカリと遊んでいた。見知らぬ男が、

バイクを降りて声をかけてきた。

「ねえ君たち、安くて、おいしい食事が取れるホテル知らない」

「えっ」

「あつ、ごめん。驚かせちゃったかな。ぼくの名前はコウキ。世界中を旅しているんだ」

「ええつと……」

私が何と言えればいいか迷っていると、ヒカリが、

「私の名前はヒカリ。こっちでおろおろしていたのは、ミナミ。さっき言つた所、私の家なんてどう。私の家、ホテルやってて。あつ、ごめん。こっちはサクラ」

こういう時、とっさに対応できるヒカリが本当にうらやましい。

「本当!? だったら、そこに泊めてもらおうよ」

とコウキは言った。それから私たちは、ヒカリの家に向かう間、コウキのこと

を聞かせてもらった。サハラ村という聞いたことのない村出身で、バイクに乗って世界中を旅しているということ。このバイクは、死んだいところが作った物であること。旅の目的は、このバイクで世界中のいろいろな物を見たり聞いたりして、自分の知識を広げること。けれども、何でそんなことをしようと思ったのかは教えられないということなど。コウキの話は、私たちの興味をさらに深めていった。

私はコウキに、

「サハラ村の人たちとは会っていないんでしょ。寂しくないの」と聞いた。

「少しは……。でも、旅は楽しいよ。いろんな物を見られるし……。そりゃ、辛いこともあるけどね」

その後コウキは、さらに旅の話をしてくれた。村人たちがすぐく優しくかった村。とても危険で命がなくなりそうになった町。歌や踊りが大好きで、常に笑

っているゆかいな人たちがいる町……。私はコウキの話を聞いていて、いつか私もそんなふうの旅をしてみたいと強く思った。ヒカリが、  
「もうそろそろホテルに着くよ。明日は私たちが、コウキをおもしろい所に連れて行ってあげるね」

と言って、コウキの手を恋人のように強く引っ張っている。

「ミナミ、サクラ、じゃあね」

「うん。また明日」

去っていく二人を見つめながら、ふとサクラが、

「明日、ヒカリはコウキをどこへ連れて行くのかなあ」

と言い出した。私は

「ああ、聞くの忘れてた」

私たちの笑い声が、いつものように夕焼けにこだました。

く二章く 鳥たちが戦う所

次の日の朝、

「ミナミ、サクラ、おっはよう。今日はあそこへ行こうって、昨日言ったよね。早く行こ」

「あそこって」

とコウキは言った。私もよく分かっていなかったの、

「あそこって、どこ」

「ミナミも分かってなかったの」

とヒカリが聞いた。

「あのねえ、あそこって言っただけじゃ分からないよ」

となりでサクラが、私たちのやりとりに苦笑していた。私たちはどこか分からぬまま、ヒカリが言うあそこへ向かった。

「天空バトル場……」

コウキが看板を見て、首をかしげながら言った。

「うん、入ってみれば意味が分かるよ。早く、早く」

私たちはヒカリに連れられるまま、コウキをバトル場へ案内した。

中は熱気に包まれていた。大きいフクロウと小さいスズメが戦っている最中だった。フクロウがスズメに攻撃を仕掛ける。その攻撃をスズメがぎりぎりかわした。が、直後にフクロウのするどいつめがスズメののをさき、スズメは落ちていく……。その時、

「殺せえ。そのスズメにとどめを」

という男の観客の一言から、みんな口々に、

「殺せ。殺れ」

などと叫び出した。ヒカリも、サクラも、そして私も、いつものように、

「殺っちゃえ」

と叫ぶ。その歓声が最も大きくなった時、フクロウはスズメにとどめをさした。



「ウオオオー」

と会場がどよめく。しかしコウキは、

「ひどいや」

と顔をしかめた。

「ひどくなんかないよ。昔、スズメは、私たちの町に伝染病を持って来たんだ。

それで、たくさんの人が苦しんで死んだ。だから、スズメなんていなくなればいいんだ。だから……」

と言葉を続けようとした瞬間、その言葉を制するようにコウキが、

「でもね、スズメだってぼくらと同じ生き物なんだ。スズメは伝染病を君たちに運んで来たかもしれない。けれども、すべての罪をスズメにかぶせるのはおかしい。殺してもかまわない生き物があるなんて、絶対おかしいよ」

私は、言葉を返せなかった。そして、胸をするどい針で何度も何度も刺されるような痛みを感じていた。★

帰り道、私達は一言もしやべらなかつた。

何もしやべらないままヒカリ達と別れた。

(殺してもかまわない生き物があるなんて、絶対おかしいよ……)

コウキのこの言葉が頭からはなれなかつた。

く三章く小鳥との出会い

次の日、ミナミがヒカリのホテルへ向かうと中、たおれていた小鳥を見つけた。ミナミは「大変だ！」と思い、急いでホテルに向かった。

途中でサクラに会った。サクラもヒカリに会いに行くところで、ミナミは小鳥の事を説明して、二人はホテルへ走っていった。

ピンポーン

「ヒカリ！」

ドンドンドン。

「なに？ どうかした？」

「ここに来る前に、道でたおれている小鳥がいたんだよ！ とにかく来て！」

「わ、わかった」

ばたばたばた……。

「ここ！ この鳥なんだけど……」

「これってスズメじゃん、ほっときなよ！」

「でも……こんなにキズついてるし、ほっとけないよ！」

「何で！ ミナミはこの町を苦しめたスズメを助けるの!？」

「それはそうだけど……」

ミナミが答えにつまっていると、サクラが、

「でもここに置いとくのはかわいそうだよ……」

というと、ヒカリはますますおこって、

「サクラまでスズメの見方をするの!？」

「そういうわけじゃ……」

「もういい!! 勝手にしなよ!!」

「ちよつとヒカリ!」

ミナミはヒカリを呼び止めたが、そのまま走り去ってしまった。

く四章くコウキの想い

二人でだまって立っていると、通りがかったコウキが、

「どうしたの?」

と聞いてきた。

そこで、道を開け、コウキにケガをしているスズメを見せた。

「ひどいキズ……病院につれていくよ!」

三人は、ケガをしたスズメを大事にかかえて、病院へかけ込んだ。

だが、どの病院もスズメを見せただけで話も聞いてもらえず、外へ追い出さ

れてしまった。

「この町の人にたのむなんて、やっぱり無理だったんだよ」

「そうだね……」

「あきらめちゃダメだよ！」

「まだ一つだけ、行ってない病院があるだろう！」

「でも……」

「とにかく行ってみるだけ行ってみよう」

再び走り始めたコウキ、それに続いて走って行くミナミとサクラ。

「着いた」

ガチャ。

コウキは、病院のドアを勢いよく開けると、受付の人に言った。

「急いで手当てして下さい！ ひどいケガなんです！」

「見せて下さい。……!! なんでスズメなんか連れてきたの!？」

そのとたん、病院にいる人が、「スズメだと?」「今すぐ殺せ!」などと、さわぎでした。

「やっぱり……。この町の人にはみてくれないんだよ……」

「そんな……」

あきらめかけていると、コウキがとつぜん、

「何でみてくれないんですか!? スズメだって同じ生き物じゃないですか!!」

「でもスズメは許せないわ!!」

「スズメだって悪気があったわけじゃない!! 同じ生き物だ!!」

「もうやめなさい。彼の言うとおりで」

「でも……」

「スズメをしんりょう室へ……」

「ありがとうございます、先生!!」

そうしてスズメを運んだ三人は、ケガの手当てが終わるまで、だまって待つ

ていた。

「もう大丈夫です。ケガは手当てしました」

「良かったあ」

ミナミ達は、病院から出るとスズメを放してあげた。

く五章く事故と旅

次の日、ミナミとサクラはヒカリの家へ行った。しばらく待っていると、

「何しに来たの？」

と、言いながらヒカリが出て来た。

「この前はごめんね」

「いいよ別に。私もちよつと気にしてたし」

「ピーピッピ（大変だー！ コウキが、コウキが……）」

突然、スズメが飛んで来た。

「ピーピーピー（実は、コウキがバイクでー）」  
スズメによると、コウキのバイクが交差点に飛び出して来た車とぶつかったという。

「えっ！ い、今コウキはどこにいるの？」

「ちよつとミナミ、だれと話してるの？ それ、昨日のスズメじゃない？」

ヒカリは心配そうに、ミナミに聞いた。

「えっ、あつ、う、うんまあ。それより、コウキがバイクで事故にあつたんだつて！ 今、県病院にいるんだつて！」

「えっそんなあ、だったら今すぐ行かなきゃ！」

「うん、行こう！」

ミナミ達は、急いでコウキのもとへ走って行った。

「すいません、加川さん、加川コウキさんの病室は!？」

「三〇六号室ですけど……」



「ありがとうございます！」

「よし、急ごう！」

ミナミ達は、コウキの病室へ急いだ。

「三〇五、あった三〇六号室」

「コウキ!!」

ヒカリは勢いよくドアを開けると、コウキのそばへ走っていった。

「コウキ！ コウキ！」

いつも冷静なヒカリが、別人のようにあわてていた。

「大丈夫ですよ、加川さんは。今は、気を失っているだけですから」

ヒカリは、ホッとしながらも不安だった。

（このまま、一回も目を開けなかつたらどうしよう……）

「ヒカリ！ 大丈夫だって！ 気を失ってるだけなんだから」

ミナミがヒカリの心を読み取ったかのように声をかけた。

「ありがとう、ミナミ」

その時、コウキが目を覚ました。

「コウキ!!」

「みんな……ありがとう。もう大丈夫だよ。でもバイクには乗れないけどね……」  
「私がコウキの旅を続ける！」

そして一年後。ミナミとスズメは今日もバイクに乗って、旅を続けるのであった。